





芭蕉翁文集巻下

甲子吟行

千里の旅立ち路糧とは孝子之更月下世何入らむ  
多岐むし人老杖子をりゆく貞享甲子秋八月江上  
乃破屋をせ程舟中静をて海客を思ひたり

聖はらへて公平風のしむ身は  
秋十と路をゆく江上をさるるを思ひ



關越の目とる面影く山さるさるかきさる

雲霧一くれ面影さるあ目おさる

何某多里とひひきさるは路のくさけさるくさあ  
ひさり心さる一侍さる莫逢の交命く朋友く  
信らるの非け人

深川やききさる通まり 歌あり 千里

富士川のききを初よとつけらる推子ねさるくはり  
北川の早瀬よかけはは波を一のくにさるをさるく  
乃今まの目や推子さる小萩さるは秋の風くさる

ちとん相立やまはるんと様より 吟物扱く色あふ

猿坂さく人推子に秋乃風くさ

いふさるや父さるはさるさる母さるさるさる  
父さる母さるさるさる母さる母さるさるさる  
さるはさるさるさる性のつらさるさる  
大井川越の目とる面影く

秋の目とる面影く大井川 千里

眼前

道乃への本槿さるにさる

二十日歸り此月二十日入るる山の松まいたる園より  
るより報をよむく敷里いする鶴鳴き尺杜牧  
早行の跡を小松の中山よみくぬき

馬子麻く跡を月をき一葉の煙

松葉屋風瀑の仔細よきと尋まはるる十日より  
言ふく外宮舟詣結りてふ一柱を居の陰ほのく  
は物交くく千んえくさくよもなれたる乃松風  
身うむさうくぬきを起し

二十日月をき一葉の松をく嵐

腰間一寸鉄は帯ひし襟に一囊を懸く手に十八乃  
珠を携ふ信を似しや塵あり信を似て整ぬ一  
信をあらはしとて整むはたのき浮屠の属  
きく庵く神前舟入をゆき

西行谷林麻糸流あり女たの草洗糸を

草洗糸女西りかきと奇よま

ま自然の片あり葉をたよまよめふてくひ  
女あつる中一葉をよまて白き緒出り糸よま  
付たり

葉のまや榛の翅よりあはれを

困人若茅全以坐ひり

苔植て并置ふれあり一か

長月れ初ねてゆらぬ小堂に坐るもてあつて果て今  
まはるにまー何まもむーにからとてかろ乃松屋  
白く眉皺よめとて今もてとれとて言ふ事とて  
一兄の守袋をほそく母を白髪かつあよ浦崎より  
玉も箱ぬり眉もやまらりととらてくはる

まにとて清人涙もあつて秋の霜

大和乃國を行脚して高野の郡并の角をあらう  
はるまはゆる千里の四里をわたり日はもゆると足さ  
休む教より奥に家なり

わく弓や琵琶子懸む并のたぐ

こよ山出當麻寺に詣て庭より松をみるたれもせ  
ゆるゆる人たさ牛坂のまともふくえんかき此情  
中毎佛縁さひり水も芥并れ死をよめうまると  
幸山一いふま

傍教教いく死の法乃松

揚子州おくにゆるりきふ山深く白雲峯に  
さきう烟霧谷を煙く山勢は家やふくく母さいさく  
西子本を伐るも東にひき東院くの鐘乃ちうん乃  
庭子あふむむうとら山入る世は世は世は人  
乃ち多くを詩りのの世にひき世にひき世にひき  
庭山はひき世にひき世にひき世にひき  
ひき坊りやせらる

碓氷く日れきやせらる坊々妻

西子人乃ち茶の居乃ち詠き奥乃院より右坊方二所より

分入けく紫人のかよるれきとらふるそはくを谷  
をくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく  
かりんはくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

碓氷く日れきやせらる坊々妻

わー是杖素くゆ果あつてもかきく口をすん若  
さき許由り昔も耳をあつても  
山城登り坂をりて秋の白院り斜なる世ハ急らふ  
不く尺ゆーく後殿彫帯此沸陵をぬむ

沸廟年をゆきとらふるを思ゆ

大和より山城を經く由の傍より入るる足邊より一むらに  
今頃山中をさぐるいみじく常盤林塚あり侍衆の  
守武つひひも殿に似る林のさかいては  
空々ありんふもまき

義朝君心少似りあをれ風

不破

秋風や敷も鳥念不破の園

大垣よりとまりたる夜を本園の家をある一とと  
武茂世を出一時野はらば公尔思ひて捨えなれ

死ときぬ藤子の果よ秋のくれ  
葉名本當寺より

冬牡丹子をよ雪はけしなれ

茅の枕下森あふてまはけくた中は瀧のこゝろ  
暖や———奥白きゆ一寸

熱田より訪の社額大に破き築地をまふ事くは  
むらうふかふ縄をまめく小社乃語をま  
まより石をまてて神と名のる蓮——のふ心のま  
まはしゆく中目出度よりまんとゆりなれ

志のゆるく枯く解ふや雪の  
名護屋より入る道乃を風吟も

相向ふは此身より舟よ似る  
草まらう大も時をく夜乃終

雪見よりありたぐ

市人よそへはらふ雪まら  
旅人をらんふ

馬坂さへかたむき雪はね  
海色より白くして

海をねく鴨水なるほのふ白  
雪よ草鞋をゆまかへふ杖をさく  
杖森かへり  
来れくはるる

やうくはめをまて草鞋をね  
とひくとも山をく

澄々草そ遠く深あふり  
素良より出る道のほ

美なるや名もねま山乃ねあ  
二月事にはるる



水よりやもみれ僧乃皆女言  
京にやうきく三井秋風鳴滝の山家をもふ

梅林

うめ白しゆるや鶯成ぬきまほし  
梅のふれ花千はりぬすくぬ

伏見西山寺住持上人あふく

我衣千ぬれ桃乃雪世よ

大津とゆるき山路を越ゆる

ふれまきくはらゆつしき草

湖水遊亭

辛吟乃和を毛よりおけろく

この体ひそく旅衣千撫をくま

躑躅ゆけくは法子干緒さく女

吟行

茶屋と花見顔が家雀の形

水口ゆく廿年を經く故人よりあふ

今二ツ中千活るぬ操の音

伊豆乃園軽く少をぬれ葉つとぬ去まの秋よりゆ御

しづかに寂寂と坐してのちのるはつとふのく尾張のふ  
ちかく跡をいしむるもあはれ

いさかしのに種まきくしん草花

此僧は身く告す日園是寺大願和尙とむ月のくも  
は化一のくもやしんやまのくもはのくもはのくも  
も南の方へせしるる

梅をく卯のふおむ洞の卯

贈杜園子

白々に羽をく蝶のくもは

二乃桐葉をくもは今や東ふらんとす

牡丹葉物くもはかす梓林余は花

甲斐乃玉山家くもは

行約のまより慰むやとく

卯月のき束の序をくもは接のつとむ

夏に海をいしむる風をともむ

鹿嶋紀行

洛東貞室瀆磨は浦の月見よりく

松の葉や月々のみ夜中納まよひの世に  
相見乃むり一室をのりて暮るにけし林鹿岳山の月見  
と思ひの山の中ありけり人ぬらひの世にけし  
室の世にけし水の中は倍倍とかきめぬらむ事おぼ  
ふに衣袋をけりあつ山山の世に像を厨にありあへ  
少中ふせをふ松枝引きて無門の関とさへいふは  
あめらちりて松の葉より出ぬ今ひらりと倍の世に  
信の世にけりすも風はるなり名をかぬらむはる世に

しと夜中めぬりて門よりけりてゆく行徳のふりあへ  
ねをあらむ馬の世のものも細粒乃ちりてあむ世に  
けりよりそり甲斐の世よりけり人の世にけり松木  
の世にけりて世をあらむにけりてやと  
ひふ里をすくれもかまうの世にけりて  
乃一千里とて目なき道なりんはけりて  
いふく二山をけりてけりて唐をけりて双剣の世にけり  
とけりてけりて庐山の隅あり

寄松平の世にけりてけりて

我門人嵐雪、向けりす〜はしと日本武蔵の〜葉  
を〜〜〜連、奇き哉人乃〜〜〜名付〜〜和あ  
か〜〜〜向せ〜〜す凍よあ〜山乃安  
あ〜〜〜萩を輝せ地あ〜きんや〜〜為伴、と横  
は折入〜都の生煮〜〜持き〜〜風塚ふ〜〜良ま〜ち  
〜〜女将家か〜もや屋花に〜懐合〜小男廉れ〜と出ふ  
〜い〜の〜野舟り〜聖の駒雨ぬ〜ほ〜も〜あ〜く〜又  
あ〜〜〜目と〜不〜言〜の〜内〜宿〜有〜利松川お〜と〜と  
ゆ〜〜ふ〜ふ〜は〜け〜川〜少〜〜魁乃細代と〜ふ〜も〜れ〜城

あ〜〜〜武江乃市にひ〜〜老ゆ〜り宵の程〜は漁もふ  
入〜〜や〜ふ〜後終宿醒〜月〜は〜さ〜く〜晴〜る〜雨〜下  
お〜ぬ〜ち〜〜〜〜と〜鹿〜嶋〜ゆ〜〜と〜海〜に〜寄〜り〜向〜け〜り〜  
海〜〜〜〜〜〜〜と〜あ〜き〜林〜藤〜〜〜招本たれ〜た〜の〜和〜あ〜と  
〜世〜の〜の〜わ〜〜〜は〜あ〜ら〜〜〜〜〜ふ〜を〜あ〜の〜〜〜ぬ〜い〜入  
〜ゆ〜ぬ〜す〜あ〜る〜人〜を〜〜〜海〜有〜を〜及〜殺〜き〜む〜と〜吟〜引  
〜さ〜〜〜く〜清〜澤〜乃〜心〜を〜ゆ〜ふ〜似〜〜〜り〜曉〜乃〜空〜い〜さ〜〜時〜ぬ  
〜あ〜を〜相〜尚〜お〜ら〜ら〜〜〜あ〜ゆ〜と〜人〜〜〜〜た〜い〜出〜ぬ〜月〜乃〜光  
〜あ〜は〜書〜也〜〜ら〜〜ふ〜る〜海〜ま〜ま〜ま〜た〜い〜と〜わ〜〜り〜み〜ち〜〜

ふくまの糸もねーさーく〜月とにま〜かひる  
こまかゝる記もなま〜かの何れ女す〜時をた〜  
よま〜しゆ〜し〜い〜さ〜あ〜ま〜ら〜ま〜前橋乃人  
な〜む〜

月とやー指を白紙持た〜

あ〜か〜れ〜ゆ〜あ〜ま〜ら〜ま〜月見外 雪

卯辰紀行

百骸九竅の中を物たりか〜に名付し 風狂坊とふ  
味〜く〜ま〜の〜風〜 破〜ま〜や〜き〜ん〜ゆ〜は〜つ〜わ  
あ〜む〜う〜れ〜ね〜む〜ぬ〜く〜久〜く〜生〜涯〜の〜ま〜り〜あ〜  
か〜は〜ら〜め〜れ〜れ〜れ〜放〜擲〜せん〜中〜紙〜お〜ひ〜あ〜め〜ら〜  
す〜む〜く〜人〜か〜む〜中〜と〜げ〜り〜は〜此〜插〜中〜に〜ま〜ら〜  
是〜ら〜ぬ〜身〜安〜く〜原〜志〜く〜く〜力〜を〜ま〜む〜ゆ〜を〜ぬ〜く〜  
た〜ま〜ら〜ぬ〜ふ〜さ〜〜ま〜 替〜ふ〜て〜無〜紙〜焼〜ん〜事〜を〜思〜へ〜も  
是〜の〜ぬ〜り〜破〜れ〜ま〜結〜く〜無〜能〜を〜之〜環〜に〜く〜ま〜は〜一〜筋  
〜つ〜ま〜の〜海〜西〜行〜乃〜初〜奇〜よ〜か〜ら〜る〜宗〜祇〜の〜連〜奇〜

おきり 帝丹乃繪くおきり 利休の筆をねぐるも其貫道  
さる物と一かなき志も 風雅におきふれ 造化のま  
うひく 四時友ともんむ 又もあはれ 造化のま  
おきり 日月のりすも 一し事なり 像花より 造化の  
夷杖く 造化の 心也 一あきり 造化の 象杖く 造化の  
杖を出る 象杖 造化の 造化の 造化の 造化の  
まきり 造化の

神を月能初を定めけり 一は身を 風葉落り  
来るまきり 造化の

諸人へ 敬書よらん 祀一と  
又山菜花を肴く 一と

岩城の住長を神とらふのは 招を付く 其南亭に  
おのろく 開送うとんと 一と

時をみよらん のをこらん 諸乃つと

けむら 露沾公より 下一 流り 世傳り 造化の 造化の  
神一 一 四友 親跡 門人 爲あきら 詩哥 又 造化の  
訪ひ 或ら 志 鞋 乃 料 を 包く 志をらん 一 月 の 糧  
りつむ 造化の 力を入も 紙衣 縁 子 一 造化の 帽を 志

やれ物心く下送りはしひもあまをたのむ苦さるる  
小く海舟あるは小艇さう久別野中あうも  
多庵下酒肴携りまうと初集を脱し名跡を  
おしひかすもさき世へあま人志首途さるる  
まうと下物あうくさうとたれ  
柞道乃日記といふのを紀氏長明阿佛乃尼を  
文をぬひ情を垂れより解と皆付似るよひと  
糟粕を段ふ中らうに中しう浅智徳才は筆下  
及くもあまのちりら面信さるり晴くそくに松りり

かたに何れも山川はまうりかたの事なれくもいふく  
まは結まふも黄衣獲新乃事といふらうの事  
らうとらうもさあくは風景心まはう山鉾聖亭  
らうとらうも結も目もさるは種となり風景は候  
少もおひひかしてはまはあふ路や先やく書信は結  
は程解る者の悟はひひもいふく人志渡さる  
事くひもらんやうく人志は結ま

鳴海は山まうり

星崎は園をいふ山や晴あま

花より井 雑章云此篇より海に接しひきよむ却て遠くから  
見えたる海を中よるをこゝと云ふは海に接しひきよむを自  
己を接しひきたりて海より接しひきたるに

京より海に接しひきたるを云ふは海に接しひきたる

之川の國保を云ふは中よる海に接しひきたるを云ふは  
心とすとの越人の消息とて海に接しひきたるは二十里  
程よりこゝと云ふは海に接しひきたるに

まゝに云ふ二人接しひきたるを云ふは

海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは

不かり

名を日也こゝより氷に接しひきたる

保島村より伊豆左海へ一里半も云ふはこゝより玉に地  
つらぬぬく伊勢と云ふ海に接しひきたるは海に接しひきたるは  
う方集集より伊勢乃名所の舟中推入ら接しひきたるこの  
例海より名を名を接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたる  
を云ふは海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは  
海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは  
海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは海に接しひきたるは



雪一ツ刃分くもすつこ崎

執田御修履

磨かきも清も清一書れも

草花のくにもくもきく野休息もすね

お招こき人もさきく一畑のさ

も人をも

もあつけくもかんにすつあかき

いさらをさきくころふ所も

或人興行

身を揮梅千花又了新徳

けるは濃大垣岐阜北まきりのゆめゆめりく奇仙

あつち一打なす夜くく乃心師走十の解り名古屋を

出さゆ四里丹入んとき

流凍一そみやくま世は凍もひ

まき名りくもまきあまこくふ日水は里よりくるか

杖つき坂よるほや高鞍うちかへくもり居ぬ

よあけりも杖つき坂は海も山

と物りらのあまらも出ゆれはゆきまきもまきり

ぬる里や掛乃結千はやの事  
ちのこゝに結多妙おしんと酒のこむゆくとえ日  
麻のこゝに結多妙おしんと

二日しめりてはれむ乃去

初春

とろとろまゝに九日結野山へ  
枯きややうけろふたぢ一二寸

伊賀の國に波のたふ所は後集上人乃回船あり  
護峰山新大佛寺とや云名もつりぬる果の形と

かゝく伽藍を破きて礎を結一坊今を結く田畑と  
名のかゝる丈六れも像ハ昔乃掃て埋て沸く一の現  
然とあれさき結ひよ上人乃結新まいまもつりてお  
とまゝに結もそま代乃名結とふ西のく泪の結く  
まゝりて石乃結る若樹子乃結るは蓮葉結上り  
堆く双林の結も結るはあゝる結るは結るは結るは  
丈ふりかきろふも一石結上  
故主輝吟公乃題とく

さゆくは事おしむを様とく

伊勢山田

何のまを花も志くは白ひの那  
裸とまをの衣文も如岩の如

菩提山

け山の坐しは昔よ聖老あり

終尚舎

物乃名試ま川と少声乃わの集

細代民部雪堂會

梅の木に於やるともや 梅の電

子菴會

草梅のまの門と津乃わのまのる

神垣のうちに梅一本もかりいふ故る事と神司  
かゝの尋侍もともけりかきりたのつら梅一本も  
あくく子良の體乃屋下一も侍とけりかきりつら

沸子良子娘一りやをむし梅の電

神垣やおひもかきを 涅の聚像

活生まをの程も海平とまを立んぬ花乃我を乃川  
枝打とかりく芳野をたに思ひまんとまをふの如

つら崎とて勢なり車一人乃伊勢とて出むるひた  
に諸君のしるれども見えしとらぬものふききりて  
く道り便しむるらんしむりく万菊丸と名をふ  
法りりくらしと名はさまじく其ありしとて口に出  
ぬりしとてしむるらんしむりく海軍とて

乾坤無位同行二人

より聖なる様見えしは桂木とて

吉野よりくふも見えしは松本とて万菊丸

旅の具多ふらるるのさくくせむとて物なる桂木とて

料より紙を一つ合相やうの物現多紙茶をこき目  
るんとおろし包とて後より見えしはいりてとて弱く  
力ねまき身おろし包とていりてとて道にたて  
た物なりしとて

羊外と名とて比や若り花

初瀬

まは花や若り人の中り堂の隅

是詰とて傳も見えしは花の白 万葉

葛城山

物々々一むりゆり神乃顔

之輪 多武峯 脐味 多武峯より龍門へ越るる

雲雀より一むりやさふ味も

龍門

龍門のむや上戸乃七孝不見

酒のこり浮らんかき流るる花

西河

かろくと山吹ちる、流乃言

結鈴々流 布留流流と布留流流と二十五町

山の妻さう 布引流流は乃園身田の川よさう

笠面乃流 橋尾さく越るそりりらう

橋

さうさうさうさうさうさうさう

目をむふ言さうさうさうさうさう

扇より酒をむけやちる梅

昔流

春雨乃流さうさうさうさう

美野のむりさうさうさうと野美野流さうさうさう

五月廿七日 月夜 暮るるに 露なる 花の 枝に 挿るる  
あはれ 揚屋の 池の 水に 映るる 花の 枝に 挿るる  
かり 貞室の 庭に 咲ける 花の 枝に 挿るる  
花の 枝に 挿るる 花の 枝に 挿るる 花の 枝に 挿るる  
風流に 咲ける 花の 枝に 挿るる 花の 枝に 挿るる

和歌

父母乃 終身 終身 終身 終身

花の 枝に 挿るる 花の 枝に 挿るる

万葉

和歌

新嘉 紀三井寺

紀三井寺

新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺  
新嘉 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺 紀三井寺

のまゝの能者といふ者も其の如くはなりと云ふは  
 おん事なきは其の如くはなりと云ふは  
 あつむすは其の如くはなりと云ふは  
 かぶりぬは其の如くはなりと云ふは  
 と其の人も其の如くはなりと云ふは  
 と其の人も其の如くはなりと云ふは  
 指ひ振中に金をいれし心持と其の如くはなりと云ふは  
 中もかゝると思ふ事も其の如くはなりと云ふは

衣更

一ツぬいしは年夏ぬ衣  
 吉野あて布子着てし衣  
 灌佛の自ら着る衣  
 衣をいしは年夏ぬ衣

招提寺鑑真和尚末朝の時  
 志の如くは其の如くはなりと云ふは  
 終ふ事係を申す

わの葉は其の如くはなりと云ふは

手前友よまふらふとつて

麻乃角すの一節乃月と神

大坂をいふ人あつた

柱あつたをいふは乃一ツの節

は磨

月をいふ神をいふは乃月と神

月をいふ神をいふは乃月と神

卯月中は乃月と神をいふは乃月と神  
月をいふ神をいふは乃月と神  
月をいふ神をいふは乃月と神

啼出つてを東中へ海の才より  
おほいなるをいふは乃月と神  
新ら身茶子花のいふは乃月と神

海士乃新まのいふは乃月と神

海士乃新まのいふは乃月と神  
小のいふは乃月と神  
いふは乃月と神  
いふは乃月と神  
いふは乃月と神  
いふは乃月と神



海生乃わきまをこころきりて古戰場の各跡を尋ねて  
かゝるゆゑをばやこころに記し得く程も一たび  
ままたてりてこころに記し得く程も一たび  
一かりこころに記し得く程も一たび  
桂麻の葉店をて抱くこころに記し得く程も一たび  
小刀の事りかゝるこころに記し得く程も一たび  
まゝにこころに記し得く程も一たび  
羊腸陰咽れ定程をこころに記し得く程も一たび  
たゞあまこころに記し得く程も一たび

をまゝに  
道守師乃ちこころに記し得く程も一たび

はこころに記し得く程も一たび  
海にまゝに記し得く程も一たび  
まゝに記し得く程も一たび

明石夜泊

樽壺やまの如きまゝに記し得く程も一たび

かゝるゆゑをばやこころに記し得く程も一たび  
まゝに記し得く程も一たび

世にいさゝか知れし事にして思ふに心  
匠の拙き事一ありはるは信徳西の山とやうふ  
んてく頃戸の石乃海を系する是れ東南の海に  
かゝるや抑も人乃見物もはるは境りと  
思ひなす事一もて後の方に山を宿く田井此柳のふ  
不松風村のゆる里とて尾とつて身丹能路へ通ふ  
乃あり陣仗乃るき逆落りておれら一き名はとて  
種魚松より下とふ一の岩内裏に岩目乃下に見ゆ  
て代志乱れの時乃露身はれりて心ゆく心付り

つゞく二位は尼君自ら抱きし女院乃は堂より  
御定もこれ船やとれまはれし入る事ふはるは海内作  
局女嬬曹子の事とていさゝか其由渡夜をてつて  
御覽取るんとて水浦をうとてて船中より  
投入供侍らまはれしとてその御つらと様も  
んてれくありは捨る事とてつて事果は也といはれ浦  
りやゆり事候の事とて熱あくはる事也

更科紀行





猿渡一歩り越乃人々切らぬはる風情のしるし  
中もゆきほろむさふ田じりてはるの鳥入る猿渡玉  
危乃をもちもゆもあつてはる

あは中一と西の月  
棧やい乃ち成りてはる草かたつ  
梯やまの思いつつるむさう

秀勝も梯と目もぬさうはる 越人  
猿渡山をい幅とふ里より一里より南に西南に梯  
をもちて冷しをさく丸のまかしくはる若さうはる

さああこれゆき身の上のすわつたはるさあこのしるし  
きんもあつてはるしるしはる中も何れも何れも  
若さう人を持さんと思つてはるはるはるはる

付や猿ひやうかき月乃友  
いさよひささくはるはるはる  
さうあやとよはる月乃中はる 越人

ひさしとてはる露もやあつてはる  
身あつて大根とてはる 秋風  
本宮の様さあ世の人若さうはる

送る事山別つとてき本号乃抄

善光寺

月新や 曰門曰家とくく一ツ

吹とくま 石を清法に申す事

石臼を真

市中よまきく信受よよまぬ抱ききふそけきくもきと  
よくするよめもそけ終るさかしくけくまかきく高山竹

林の居士も様おきくつ二人寛平花山の上白堂を終り  
とくくくまきも本備くく種をもんくくくもく石臼を  
ひくくのまき一國所をさかきくくく肉身をやまひ  
は身をくく民をさかきくく麦刈をむくくくくも粗くた  
落もきくくくくく片時も余ふふす事かきくそ乃  
くまきくを論をきくくく優優安樂の唐花中にかきく  
く彼をくくをさかきくく乃上母をくくく上と下と  
ゆきくは力たきくく考れもめふさかきくく  
不説土回くまきく送よりおをくくく謙よ居る事

乃調ふふあはれかかむも黄婦のふくもきしはふ  
くはるくはくははぬくはくくはくくく目か  
種は成時かまはるをあら老翁の出まうくはうく  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か

ふき文王乃始り仕をまへに事たのそやを授き  
むくくはくははぬくはくくはくく目か  
またくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か  
くはるくはくははぬくはくくはくく目か

雲井乃瀆

洛乃業門雲井自は像もあらんらあはれ方り  
ゆきむきくはくははぬくはくくはくく目か

くねも君と六十年あふり平を院よみ中いちう  
少のふら中じく夢形をあらはし是にくう  
くうと我のま

こちむけ我をけりひが枝のれ

梓折の誓

此梓の折まきと名付まのまよつこくめくは  
まよひ目玉夜枝葉れ去物くたれり女ひつ乃山

くり生むく何國の里れ結、碓のかみ成そやむりら  
横根く今まを入く解くま人路とれ具ふ名を  
路ゆいへる人よまかかられまいさるる名を  
ひあふ者まもむいれく世中を横根が  
こ乃楯のまの椿、梅の本を

辛卯結小形なるん

あふまよく一暮きたま一まをまね好水一



いつ神の人からいはずいづれも人の心は一つ  
の載りもはらう今もたれは心をたのむとある時を  
さるもこの世にまゝいへば世にまゝいへば心は  
いづれも

もいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

西行上人の賛

さうしてさういふからかたもたれもたれもたれも

あつてさういふ花乃ゆふ月さうさうさうさう  
いづれも

閑居の歳

あつてさういふ花乃ゆふ月さうさうさうさう  
いづれもいづれもいづれもいづれもいづれも  
ちふたれを月夜さの相のそ友乃さうさう  
いづれもいづれもいづれもいづれもいづれも



是はあもて一用をせんや  
二用とせんや

座右の銘

人乃經を以事かこむこ長をさくゆぬれ

銘に曰

おいは唇さき一秋の風

東順の傳

老人東順と横氏とて其祖父江列堅田の農士竹氏  
と稱す横氏とてその晋子の母方ふふと其たりと  
十午歳ぬゆを其秋を月をやり舟抱の上ふゆめく花  
も其情露を少一めふ思ひかふう其床のほらとて  
神とて其終一、又神の白紙かてみとて大業  
妙曲の基に保つわつと一、時醫書を學ひく恒の  
と一、本多何某乃公より傳跡をゆふ谷釜魚醜  
塵乃愁すれ一、はまも世路をいひく名は乃

衣をあらう杖を折く業をすて改より一平白の  
かり市店に山居のかつて樂むをたのむに  
机をさしめり十通あり其をたすまはし  
こほりて湖より生きたる東野に送る  
是の御守大隠朝市の人なり

入月北の夜を机を日陽の南

古戦場は吊ぬ乃文

之代乃榮耀一膳乃中申く大阿乃汝を  
一里くおふらと秀衡の汝を田野よりて  
金鷄山のこねをたすまはし高館よりはまの川  
南都よりかなはく大河より夜川八和泉の珠をの  
くまはく高館の下にく大河より入る康衡の  
四路を夜の間を隔て南都口をさしめあま  
ゆをくまはしとて扱を義居すまはし此城  
よりあつて功名一時の叢とけり國破るく山  
はらうと城春めく

時ははるかに海を渡る一はり男

夏ふさや兵ももつ着の 迄

山嵐蘭乃誄

金革を禪中へあつてもまらぬ士の志也文質  
偏きくはふさやの君子はいさをしと云ふ松倉嵐蘭  
義を中身と實は揚め老在を魂よかましく  
風程を肺肝のよりあそひさせ 予とちぢむとせ

ナとせあまると九とせとやけととあつてもまらぬ士  
山石洞子先賢の跡をまらぬと云ふ老母をささひ  
稚くもはげしくと云ふ世はよきと云ふはれは  
栄辱はるる一居は思ふ風をいそぐ今年  
仲の海中の二日中井金海の波乃乾し一月をふ  
とく 濡る者一杖を束ねたのかつたはと云ふ地がやま  
とく 一とく 終る息絶ぬ回一きとせ七日はおの事  
小や七十は乃母よと云ふ七葉は稚子よ思ひをたす  
いそぐと云ふ 齋ひおとせにふと云ふは公はあま

腹をくちくちくし悔をなすつゝはれたるぬを秋  
 風も吹かすはらわらぬの夜にうらまをきくと口をくち  
 しある身今に何なりとてしつゝもあやまに  
 老母の恨をうけつゝはなもたさるゝをかたむら  
 とくくをさしつゝ親接の別少くしつゝ月  
 とつみに稚子うらまをきつゝもあやまに  
 子もほきとくまうはふ王戎ぬ糸は眼は  
 うふいと戎の一字を摘くは戎と名づく其の  
 恨くる色今目にあらうとさしつゝはれむら何むら

めもたかしてそ人々志れつゝ習まして父乃如く  
 りつゝもくものくは足乃如く少くはひなま  
 むつゝは伴乃愁の夜にむも何れを掩るま  
 めくまらふや弟をさしつゝ思ひたるのくむや  
 もたはれぬくはむもはれは物なむらむらたは  
 まらむらかむらむらむらむらむらむらむら

秋風を折るか所を棄れ枝

此後京都よりゆりにこの二冊巻の事案を  
 くらひて大體せん世よぬ草紙爲翁乃文集をり  
 けりて流年それえし免職とる世をりて誦ま  
 せらふ世と二十九巻り後と乃文選の例り  
 ちりて載せしむるに社翁の文集と作て  
 くれ道乃好まれ書質がく一志の事と都  
 の人ら書けり事れかこゝんり紙抄ひいさ  
 形より伊をつくのひては文集を梓よりめり

いふ福く詠鄙の友の友人をねがふもい道  
福の真加をねがふもい道

瓶を福園みち店のある

蝶解

江戸

山崎 金兵衛

井筒屋 庄兵衛

橋屋 治多浦

合梓

蕉門俳諧書林



手記  
乃  
び  
し  
の  
紙  
の  
摺  
り  
葉

手記